

防災新聞

災害を
生き抜くための
挑戦

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から25年。この間も、私たちは大雨による洪水や地震、津波などさまざまな自然災害に苛まれた。また、スーパー台風やゲリラ豪雨などが頻発し、先の見通せない時代を生き延びている。いつも、誰もが被災者になりうる。今、私たちは何を考え、何を準備すべきか。さまざまな方面で取り組まれている「災害を生き抜くための挑戦」を追った。

支え合い 地域の力を結集

少子高齢化や家族形態の変化などで、地域のつながりの弱体化が危惧されている。それは地域防災力の低下を招く。いかに地域の絆を強め、災害に備えるか。各地で始まった「支え合いのまちづくり」の現場取材した。

防災・配食 ボランティア

新野中学校生徒が、日頃の防災学習の成果をまとめたパンフレットを民生委員・児童委員の皆さんが作ったお弁当と一緒に一人暮らしの高齢者に届けている。



高齢者にパンフレットとお弁当を届ける新野中学校生徒

「防災・配食ボランティア」は、高齢者と中学生に交流をもってもらおうと平成27年から毎年3月に行っている。中学生は、半年間学習した内容をパンフレットにまとめた。そこに町の注意すべき箇所なども盛り込んだ。

住民支え合い マップを作成



マップづくりに取り組む福井町住民

町には、一人暮らしの高齢者が約130人生活していて、災害時に孤立しかねない。新野地区民生委員・児童委員協議会会長の丹生川和彦さんは、「世代を超えて顔見知りになり、見守り合って、普段から助け合える関係を築いてほしい」と語る。中学生からは、「高齢者の方と触れ合えてうれしかった」「地域の輪をより深めたい」との声が続出された。

福井町住民が、「住民支え合いマップ」の作成に取り組んでいる。住民支え合いマップとは、住宅地図上に高齢者や障がい者、子ども、乳児・妊婦などの要配慮者や避難所、医療機関、危険な箇所などの情報を記載することにより、災害時

取材を通して見えてきたことは、災害時には普段からの人と人とのつながりが大切だということ。平日頃から支え合いのことができるまちづくり、災害に強いまちと云えるのではないだろうか。

市庁舎で避難訓練

迅速で円滑な 避難の実施を

市指定緊急避難場所となっている市役所庁舎で初の津波避難訓練が行われ、近隣住民など138人が参加し、発災時の迅速で円滑な避難に向けて、避難経路などを確認した。



市庁舎へ避難する住民

訓練は、南海トラフを震源とする巨大地震が発生し、阿南市内で震度7を観測したほか、沿岸部には大津波警報が発令されたとの想定で実施された。

市役所周辺に避難を呼び掛ける防災行政無線が流れ、住民は自宅などから市庁舎へ避難。正面玄関や東側玄関などから駆け込んだ。避難した住民は市庁舎1階で受付を行い、安否確認を行った。また、訓練後には、発災時の避難についての講習会があった。

訓練に参加した羽田義弘さん(65歳・横見町)は、「避難する途中で気付く点が多かった。家族や近隣の避難に役立てたい」と話していた。

津波発生時には、市役所庁舎低層棟1階のあなんフォーラムに750人避難することができるとのことだ。

災害ボランティア養成講座

被災地を支援したい

被災地でのボランティアの育成をめざす「災害ボランティア養成講座」(阿南市社会福祉協議会主催)が令和元年11月10日、科学センターで開催され、76人が参加し被災地での支援方法を学んだ。



フルシート張りを実演する=科学センター

大阪北部地震などで復興支援に携わったNPO法人災害救援レスキューアシスト代表の中島武志さんなどが、床下浸水処理など実技を交えて講義。被災した家屋の屋根にブルーシートを張る作業では、容易に手に入る資材で、手際よく作業する手順を伝えた。熱心に受講していた青木正繁さん(45歳・日開野町)は、「今日得た技術を被災地支援に生かしたい」と話していた。

島の安全は私たちが守る



伊島町で、子どもたちが自ら島の安全を守ろうと「伊島少年消防隊」を結成し、昭和46年結成以来、50年を迎えようとしている。島は洋上に位置するため風が強く、民家が密集し、火事が起こると周辺家屋に延焼する恐れがある。消防隊は、伊島中学校全生徒で組織。可動式ポンプ

伊島少年消防隊

の使用を習得するほか、12月には、町中を拍子木を叩きながら歩き、「火の用心」などと注意喚起を行う。また、町の人とともに防火訓練を行っている。活動に取り組んだ水本太陽さん(3年)は、「活動を通じて、島を守る意識が強くなった」と語る。活動時に被る青い帽子は代々先輩から譲り受けたものの。これからも郷土を思う気持ちとともに引き継がれてゆく。

話し合おう 家庭での防災

FCP(Family Continuity Plan) =家族継続計画

災害が起こった時、企業や官公庁などでは、事業を続けたり、早く再開させたりするために事前に被災後の計画「BCP=事業継続計画」を策定することが浸透している。これを家庭に置き換えたものがFCP。

地震や津波などの災害が起こった時の対応方法について、あらかじめ家庭内で決めておくことが重要。避難のルール、安否の確認方法、備蓄品などについて、日頃から家族で話し合っておこう。

高台に避難する住民＝樅泊町



令和元年11月23日、沿岸部に位置する樅泊町で初となる、二次避難までを想定した防災訓練が実施された。

南海トラフ巨大地震・津波発生を想定。住民は、急いであらかじめ決めてある高台に避難。その後、山道などから、二次避難場所となる樅泊小学校に避難した。

また、町の防災を考える講演会や軽軌急車の展示が行われた。

より速くより高く 樅泊町で初 二次避難訓練を実施

付与された状況を整理する市職員＝市役所



11月22日には、訓練を振り返る研究会を開催し、今後の業務改善に生かすよう意見交換などを行った。参加した福祉課の片山健一さん(40歳)は、「大災害が起きた際の対応方法などを学ぶことができた」と気を引き締めていた。

南部圏域 防災訓練

訓練は、午前3時に徳島県沖でマグニチュード9の地震が発生し、津波が押し寄せ液状化現象が発生しているとの想定で実施。防災6時間後の災害発生初期の情報活動および災害応急対応策を行った。

事前に内容を伝えず、刻々と状況を付与していくフラインド型訓練の中で、参加者は与えられた状況を判断し、情報を整理したり共有したりした。また、必要に応じて警察や自衛隊など関係機関に連絡した。

防災時 初動対応を確認

防災意識は子どもの頃から 防災啓発標語・ポスターコンクール 10年

阿南南ロータリークラブ



阿南南ロータリークラブは、平成18年に防災委員会を設立し、積極的な防災活動を行っている。防災意識は子どもの頃からと市内小、中学校に呼び掛けて実施している「防災啓発標語・ポスターコンクール」が今回10回目を迎えた。標語455点、ポスター105点の出品があり、優秀作品の展示を行う。

第10回防災啓発標語・ポスター コンクール作品の展示

日時 3月3日(火)～26日(木) 8:30～17:00
※3日は12:00から、26日は15:00まで
場所 ひまわり会館
〒阿南南ロータリークラブ事務局
(ホテル龍宮内 ☎27-2027)へ

防災標語最優秀作品

- 戻らない 荷物より先に 自分の命
福井中学校2年 岩浅 真緒さん
- 災害に 地域で備える ワンチーム
桑野小学校6年 吉田 倫太郎さん
- にげるとき となりの人に 声かけて
新野小学校2年 笹松 歩花さん

防災ポスター 最優秀作品



阿南第二中学校2年
外磯 大貴さん



津乃峰小学校4年
西本 海唯さん



津乃峰小学校3年
四宮 陽人さん

多様性を尊重した防災を

阿南市人権教育・啓発研究講座が、2月4日、市役所で行われ、22人参加し、防災という観点から人権を学んだ。

講師の南部総合県民局政策防災部の小西良子さんが、人権に配慮(多様性を尊重)した防災についてわかりやすく解説した。



被災者支援について考える参加者＝市役所

小西さんは、「避難所には、女性や高齢者、乳児・妊婦、障がい者などさまざまな支援や配慮が必要な人も避難する。みんなが安心して快適に生活するには、多様な人々の違いに配慮した体制・支援が必要。また災害が起こる前に、考え準備してほしい」と伝えた。

野村誠也さん(67歳・下大野町)は、「さまざまなことに配慮した避難所運営が必要と分かった」と話していた。

みんなで歌おう 「避難所巡りの歌」



津乃峰小学校

津乃峰小学校児童は、自らが作詞した歌「避難所巡りの歌」(作曲：高石ともや)を歌い、日頃の防災啓発に役立っている。毎朝校内放送を流しているほか、地域住民への普及に努めている。

歌には津乃峰地区防災公園、両皇神社など津波発生時に避難する高台が盛り込まれていて、歌いながら避難場所を覚えることができる優れたもの。校長の多喜川広伸さんは、「この歌が、学校だけでなく、地域全体の防災啓発につながってくれば」と話していた。

同校は、優れた防災教育を行う学校や団体を顕彰する「ぼうさい甲子園(1.17 防災未来賞)」において4年連続で小学校部門の「ぼうさい大賞」を受賞した。